

# バードの足跡 散策のお供に



「イザベラ・バードの山形路」を出版した渋谷光夫さん

## 渋谷さん(山形)本県ルート紹介の本出版

英国人旅行家イザベラ・バード(1878(明治11)年に旅した県内ルートを紹介する「イザベラ・バードの山形路」『アルカティア街道』散策のススメ)が出版された。著者は山形市の山形教育用品社長で山形大客員准教授の渋谷光夫さん(63)。紀行文に沿って現地調査を重ねる一方、明治時代と最新の地図を並べるなど工夫を凝らし、街道の今昔を浮かび上がらせた。

## 明治と現在 地図を掲載 街道の今昔浮き彫り

渋谷さんは山形四小校理事(戸沢村出身)が09年長などを務め、2008年に企画したバードの県内に教員を退職。東京のNPO法人「元氣・まち」に参加し、興味を膨らませ「ネット」(矢口正武代表)だという。その後バード

が歩いた場所へ足しけく通い、多数の文献などを参考執筆した。2章で構成し、第1章でバードの人物像や日本

イザベラ・バード 1878(明治11)年、東京を出発し東北、北海道を旅行した新潟から十三峠を越えて本県に入り、置賜盆地をアジアのアルカティア(桃源郷)と称賛。川西南陽、上山、山形、金山などを経て秋田へ向かった。日本での旅の紀行文は英国などでベストセラーとなり、日本でも日本奥地紀行「イザベラ・バードの日本紀行」などとして出版されている。

1カ月近く待たなければならず、陸路に変更し十三峠を越えて山形を目指したという。渋谷さんは「バードは明治政府の保護を受けていたと考えられ、戊辰戦争で幕府側だった庄内を経由しなかった。初代県令三島通庸が進めた最先端のまちづくりを見たかったことも山形を回った理由ではないかと話す。また、離日後も5度来日

したことなどを取り上げ、英国のため諜報(ちようほう)活動をしていったのでは、と推察している。第2章は、新潟県境の大里峠から置賜、村山、最上地方を経て秋田県境の雄勝峠に至るバードの県内ルートを11区間に分け、街道の当時と今を紹介。明治30年代―大正初期に発行された各区分の5万分の1地図と最新版を並べた他、三島県令が造った橋、道路などを描いた画家高橋由一の版画や、写真を織り込んだ。

「バードは旅の達人。その文章から明治初期の日本の様子がきめ細かく伝わってくる」と渋谷さん。県内ではバードに接した地元の人による日記などが見つかっており、今後の発見に期待している。「イザベラ・バードの山形路」はA5判で1890円、発行元は無明舎出版。